

立原正秋全集

第十二卷

角川書店

立原正秋全集 第十二卷

昭和五十七年十二月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三一三

電話東京二六五一七一一（大代表）

振替東京三一一九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573412-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたしません

立原正秋全集
第十二卷
目次

あだし野

五

血と砂

一五

解題

武田勝彦
四三

あだし野

第一章 愛する人達

一

壬生七郎は太陽を背に勾配のゆるい坂を登りきり、顔をあげた。急坂でもないのに彼はいつもこの坂を喘ぎながら登る気がした。

彼の目の前には銀杏並木の広い道がまっすぐのびていた。銀杏の枝からときたま散りのこりの葉が落ちるなかを、真紅のスエーターに黒いスラックス姿の女が彼の十メートルほど前を歩いていた。静寂な冬の午後の陽ざしのなかで女の姿は鮮やかだった。異国的だなと彼は前方を歩いている女のかたちのよい尻がかかるく左右に動くのをみた。

雑然と家が並んでいる郊外のこの一角で、いま壬生七郎が歩いている高台だけが、なぜか幾何学的に造られていた。ゴシック式の洋館がたち並び、そのなかを石を敷きつめた広い道が縦横に走っていた。久しい前にここではヨーロッパ人が住んでいたのだろうかと壬生七郎はここを歩くと共に考えた。彼がバスから降りる停留所はTという町で、その停留所は高台の麓を迂回した北にあった。彼はいつもT停留所の三つ手前のS停留所でバスから降り、高台を南から北へ横切り、T町についた。彼が幾何学的に構成された高台のS町を歩くのが好きなのでもあったが、T町の女のもとに着くまでに、数時間前までいた海辺の町の匂いを自分のからだから消すためでもあった。彼は幾日ぶりで逢う女のために心の準備が必要だったのである。彼は海辺の町からT町に着くたびに、T町から海辺の町に降りたつ

たに、俺はいつたどこに安住しているのだろうと考えた。こうして独りで歩いているときだけが自分本来の姿ではないだろうか？ 彼はいつもそう思った。

真紅のスエーターの女が白い横顔をこっちにみせて十字路を右にまがって行った。壬生七郎はやがて高台を通りぬけ、下り坂にかかった。麓には幾日か前に別れを告げた見慣れた風景がひろがっていた。畑の向うにバス道路が東西にのびており、その向うに白壁の古い土蔵が建っている。土蔵のそばには葉の落ちつくした櫛の高い梢が午後の陽に美しく光っていた。庭に柿の木が一本あり、頂上に赤い実が数個のこっていた。そして柿の木の下には洗濯物が何枚か干してあり、その白さがその家のさやかな生活を語っていた。土蔵のそばの小さな家。壬生七郎には、その家でひっそりと自分を待っている女のたたずまいがみえた。彼は立ちどまってそれらの風景を一瞥し、あそこにも俺は安住していないのだと考え、それから坂を降りだした。俺のなかにT町と海辺の町をつかいわけている二人の男が棲んでおり、その二人の男をみつめているもう一人の男が棲んでいる。生活の糧を得る仕事はなにひとつせず、二人の女の前で自分に都合のよい嘘を並べたてながら二つの町を往復している男。いつからこうなったのか、そして現にこうして生きていながら、どこにも安住できる場所がないとは、これはどういうことだろう。ただひとつ俺にもはっきりわかつているのは……彼は自分のなかに女を愛するという不治の病をみていた。彼の母はこれを癒えることのない病だと言った。彼はときおり歩いてきた方角をふりかえっては、そこに病んできた亡骸を見出し、にがい気持になった。彼は坂を降りながら、海辺の町の妻の物腰を忘れようと努めた。風邪からおきあがったばかりの彼の妻が、彼にもう数日いて欲しいと考えているのが彼にはわかっていたが、彼は妻の目を避けて家をでてきた。じきに学校から戻る子供とあつてからいらしたら、という妻に彼は腹をたてながらでてきたのである。彼は、無言で語りかけてくる感情をいっばい湛えたそのときの妻の目を忘れようと努めた。するとそのそばから、彼女と恋をし、いっしょになった頃の目くるめく日々がよみがえってきた。あの時分から彼女の髪は乾草のにおいがした。海苔の香がするくちも昔と変わらない。俺達は倦むことを知らないはずであったし、わけても彼女の優しい愛撫の仕草はながく俺のなかにあとをとどめているが……しごく貞潔なこの女に彼はなにひとつ不足はないはずだったが、彼はいくどもこの女を裏切つてき

た。俺は、彼女を愛していないからと一再ならず無理なこじつけを自分にあてはめたこともあったが、そんな自分を恥じもしなかった。要するになにひとつ不足はないということに俺は不足だったのだろうか、俺自身の不治の病をのぞけば？

坂を降りきるとT町のバス道路である。道路を横切り、肉屋と魚屋のあいだの路地の奥に白壁の土蔵がみえる。俺はあるとき、妻から、りっぱな父親だことと言われたとき無性に腹がたったが、この理不尽な腹立ちはなんだろう？俺はあるとき子供にあうのが怖かったのだ、と彼はそのときの自分の姿を正直に認めた。俺はいつもの手で自分に都合のよい嘘をならべて家をでてきた。彼はそうした自分をむごい男だとも感じなかった。しかしこれは子供や妻よりT町の女を愛しているということではないし、T町の女より子供や妻をより愛しているという証拠も俺にはない。すべては俺の身勝手から生じた状態だが、要するに俺はどっちも裏切れないのだ。彼は、妻や子供の視線を気にしいしいT町の女のもとに去る自分と、T町の女のおもわくを気にしながら子供と妻のもとに帰る自分を思いくらべ、改めて身の置場のない自分を気の毒な男だと思った。

彼は生垣塀に沿って路地をつきあたり裏木戸を入ると、白壁の土蔵のかたわらをぬけ、離れ家の前に立った。物干竿には数日前彼が脱ぎ捨てて行った下着が干してあった。磨礮子窓にうつむきかげんの女の赤いスエーター姿の上半身がうつっていた。アイロンをかけているにちがいない。こんなとき妻ならすぐ戸をあけるが、この女は俺が部屋に入り向きあっても表情ひとつ変えない。もっとも俺はこの女の無表情な顔に惹かれたのだが。彼は濡縁に腰かけ、靴紐を解いた。

彼は部屋に入ると、だまって着換えをすまし、机の前に坐った。彼は坐りなれたその場所を懐かしいと思った。俺は海辺の町の机の前でもこれと同じ思いをするが、なんだろう、この感情は？

「おそかったのね」

女はアイロンをかけながらぼつりと言った。堪えていたものが、彼の坐るのを待って突いてでたような言葉だった。「子供が病気だったもので」

彼はひくい声で答えた。

「もういいの？」

「ああ、いいらしい」

「それはたいへんだったのね。子供さんが病氣だったから仕方なかったでしょうけど、それならそれで、おそくと電話ぐらいでできなかったの」

「そうだったな」

「にえきらない返事ね」

「子供のことなど、あなたに言いたくなかったからな」

「なんで？」

「その子供をうんだ女は誰かって、いつかあなたから言われたとき、ぼくはひどくこたえたことがある」

女はだまりこみ、アイロンをとめると、あれは言いすぎだったといまでは後悔していると言った。女はアイロンしかけの白い布地をみつめていた。無表情に動かないでいるときの女の居ずまいに、壬生七郎はいつも女の心をみていた。表面はおちついていてる女の内側で青い炎がちろちろ燃えているのを彼は知っていた。彼はいつも、内に激しいものを秘めながら表面は動きのない女のこのたたずまいに接するたびに、どこか別の場所でこれと同じ姿勢にであつたような気がしていたが、いまふつと、ある冬の一日をおもいだし、あれに似ていると思った。能楽堂であつた〈碓^{きね}〉の後シテのたたずまいであつた。胸のなかはほむらだが、しかし声はせず、といった状態を、あの後シテは右手に持った扇と左手を動かすだけで表現していた。あれは動きがない状態でありながら、もつとも表情の多い姿態であつた、と壬生七郎は思った。すると彼はこんどは、生家に入入りを拒まれる前に母から言われたことをおもいだした。へあなたはいつか女のために女に殺されますよ。彼はこのときこれを他人事^{ひとごと}のようにきいていたのを記憶していたが、時間がたつにつれ、この言葉のもつ意味が鮮明に浮きぼりされてきた。そこには、夫から煮湯をのまされてきた女の実感がこもっていた。

「亡くなったあなたの父さんも、あなたも、遊びとして要領よく処理できない人達ね。夢中になるのは血統なのかしら」

「そんなとき、母さんは、いちどもふみはずさなかったの？」

そして息子は心のなかで、よく亭主からうつちやりをくった人妻が反動で他の男に走るじゃないかとつけ加え、若かった目の美しい母が他の男にからだをまかせせる有様を想像し、俺はひどいことを考ええると思った。

「え、なに？　ばかね、煮湯をのまされ続けで、そんなこと考えるひまなどあるんですか。亡くなるときに、やっと家に帰ってきたわ。遺言というのが、わらいながら、それも童顔のような人なつこい顔で、おまえだけを愛していたよ、という一言だけだったわ。そしてそのまま息をひきとったわ」

「母さんはそれを信じたのか？」

「信じる以外に方法がありませんか」

壬生七郎はこのときの母が優しい感情に包まれていたと思った。彼には父の言葉が真実だったかどうかを知るすべがなかった。幼いときに父を失っていたので、父に関しては周囲からきいて知るだけであった。彼の父は、かつて関係のあった女達めいめいにいくばくかの金をのこしてあり、彼の母は夫の死後、それらの封筒を女達に送ったそうである。彼は母からこれをきかされたとき、ふと、封筒のなかに、いくばくかの額を記した小切手といっしょにへおまえだけを愛していたよ」という文字を記した紙きれが入っていなかっただろうかと思った。彼は、人間は芝居しているようにみせかけて実はそれがほんとの芝居であったり、真実であるようにみせかけて実はそれがまぎれもない真実であった、などという場合があるわけだと思った。彼は父の対女性関係を考えてみて、彼の一生はすべて芝居であり、そしてそれは同時にすべて真実であった、と考えてみた。そして結局のところ彼には父のことはなにひとつわからなかったが、俺は父に似てきたのかも知れないと思った。

女は再びアイロンかけをはじめた。

壬生七郎は机の上のものを懐かしい思いで眺めた。彼は机の前に坐るたびに、ここがやはり俺の居場所だったと思

うのである。海辺の町へ帰ったときもそうであつた。そこで着換えをすまし机の前に坐ったとき、そばで妻が茶をいれるのをみながら、ここがやはり俺の居場所だつたと思うのである。そして彼はどちらへ帰つても着換えた服に数日前の自分の体臭をかぎだした。そして煙草をつけて、いったいこの感情はなんだろう、と考えはじめた。そしてどのつまりは、俺はいったいどこに安住しているのかと考える。彼はそんな自分に自己嫌悪も感じなかつた。二人の女をうまく欺して自己嫌悪も感じないこの俺はいったいなんなのだ、俺にはおねのところで感情が死んでいるのだらうか、それともまったく倫理感が欠如しているのか……そしてしまいに彼は、いつものように、俺はいまとなつてはどっちも裏切れないのだ、と決めこんでしまつていた。

アイロンかけをすませた女は、今日は集金があるから早くでるといい、すぐ鏡台の前で化粧にかかつた。

暮方になると壬生七郎は買物にでる。彼はかなり前から主婦達にまじつて夕餉ゆうぐの菜を買う自分の姿に嫌悪を感じていたが、しかし女が酒場にでた後はそれをやめるわけにはいかなかつた。なにもしないで暮している男、二人の女のあいだを上手に泳ぎまわっているこの男は、買物から帰ると酒をのみながら自分の夕食の支度をする。食事がすむと彼の唯一の仕事である小説書きがはじまる。彼は、いつ売れるとも知れない小説を書きながら女の帰りを待つ。そして女が帰る時刻をみはからつて食事の支度にかかる。T町の女のもとの彼のこの生活は太古から続いているように寸分の狂いもなかつた。

二

瀬戸泰子やすこはT町のバス停留所に海辺の町へ帰る男を見送り、そしてバスが遠ざかるのをみつめて、男が帰ってくるまでの数日間のわびしい自分のまわりを考えた。それは考えただけでも暗い風景だつた。男がいないと安心して自分を定着させる場所がなかつた。いまでは男を愛してしまつたのを後悔していた。

バスがすっかり見えなくなり、彼女はきた道をひきかえた。そして夜半に帰宅してからの独りだけの味気ない食事を考えた。男がいなくてはいけなくて干物の魚で食事をしますが、それは心からわびしい雰囲気だった。わびしいと思いつながら彼女はそれをやめなかった。ときには独りだけの贅沢な食卓を用意することを考えるが、彼女はいつも殊更にまずしい雰囲気をつくり、それにひたりきることでの身の安定場所を求めた。まずしい雰囲気にはなにかしら懐かしいおいがした。

彼女は、まだ男のにおいが生々しくのこっている部屋に帰る気がせず、T町をひとまわりした。いつものように人通りのすくない、わびしい場所をえらんで歩いた。町には樺の大木が多かった。男はいつも樺の裸木をみあげていいねと言っていたが、彼女には裸木はさびしかった。同棲しはじめてから、秋がくるときまって、庭の樹木の葉が散って行く数を勘定した。そして、来年の春樹木が芽をふくまで男との生活が続いているだろうか考えた。前の男と棲んでいたときもそうであった。自分でも不幸な習慣だと思い、男と別れるつど、こんどはすこし打算的になろうと決心したが、それができなかった。変らないのは勤めている酒場での客との接触だった。彼等は例外なしにからだを求めた。男が海岸町で他の女と寝ていると考えると、彼女も男達の求めに応じてからだをまかせたいと思うことがあった。壬生七郎と生活しているとは、壬生七郎が常に自分のそばにいてくれることではなかった。そこに壬生七郎がいる、手をのばせばいつでも壬生七郎のなにかが確かな手応えで返ってくる、これが壬生七郎との生活だった。だから壬生七郎が常に自分のまわりにいない以上、彼が精神的にも肉体的にも満足にあたえてくれない以上……彼女はいつもここまで考えると以前の自分をおもいかえた。前の男と棲んでいた頃、この男は月に三度しか現われなかった。彼女、彼女は周期的に、考えることにゆかりのない肉体労働者を寝る相手にえらんだことがあった。そこでは皮膚と皮膚をふれあわせるほかになにもなかった。そのためにはベッドを共にしてくれる男に金を払った。正当な報酬を受ける彼等肉体労働者は、彼女が声をかけないかぎり、道であつてもいままで通りの他人であつた。彼女としたら、愛とはゆかりのない契約性交に報酬を払うのは、映画をみるのに料金を払うのと同じことだった。ある町からある町へ行くのに乗物を利用するのと同じことだった。乗物があるのに歩く理由はなかった。彼女はいまも男が海岸町へ帰

った後は必ずといってよいほどこれを考えるが、それができそうもなかった。映画はみなくともすませられるものであり、ある町からある町へは歩いても行けるものである、と一方では考えていたからである。それに、考えることにゆかりのない情事をえらんでいたとはいえ、情事のあとの気持はまことに暗いものだった。そのときは即物的に処理したつもりでいたのが、時間がたつにつれ、心のなかで暗い風景となつてのこつていた。

彼女は、自分の好みにあつた壬生七郎が現われたとき、この男を愛したら自分はひどく苦しむことになるだろうと考へ、いくどか同棲をためらつた。男ははじめから無用者のたつずまいで現われたのであつた。

彼女は男が海岸町に去るたびに、夏の朝、海岸町から男の妻が丁町に現われ、男と抱きあつていた寝込みをおそわれたことをおもいだす。それは彼女がうまれてはじめて経験したすさまじい光景だつた。壬生七郎の妻が蒲団をめくり、自分の夫の髪をつかんでふりまわしたとき、瀬戸泰子は本能的に自分もそうされたいと思ひ、台所に逃げた。逃げはすみに、前夜メロンを割いた庖丁が部屋のすみにおいてあつたのをつかみ、台所から庭に投げた。

「なんの理由があつてわたしのものを盗んだのです、どろぼう！」

どろぼうとよばれて瀬戸泰子はびつくりした。

「あたしはあなたのものを盗んだわけではありません」

彼女はいまにも男の妻からなぐりかかられるのではないかと思ひながら、しかし冷静を装つて応じた。

「まあ！ 驚いた！ それならこの人がそこらの道ばたにころがつていたとでもおっしゃるの。まあ、驚いた！」
それから男の妻は坐りなおすときにナイロンの靴下が切れないように膝までずりおろした。瀬戸泰子はそれをみて、この女がこんなことをするようでは、あたしはいよいよなぐられるのかなと思ひながら、しかしこんな場面でも女はなんとこまかいだらうと思つた。男の妻の動作や言葉にはどこなく稚拙さがあつた。古典的な卵型の顔に目を大きくみはり、まあ、驚いた！ と言うとき、そこには世間を知らない稚拙さが溢れてゐた。自分の知らない世界にいる女だつた。そして彼女は、妻につれられてすごすごと海岸町に帰る男の姿が裏木戸から消えたとき、ひどすぎる、と思つた。あの女は子供がいるだけで充分ではないか。涙がでた。あの人はあたしになにひとつ弁解せずにここをで